

P-24

黄連解毒湯と釣藤散による血小板凝集能の比較検討

1) 獨協医科大学越谷病院検査部, 2) 順天堂大学医学部内科

○北条江美子¹⁾, 森三樹雄¹⁾, 高野喜久雄²⁾

【目的】各種の疾患に対して漢方療法が普及しており, 慢性あるいは難治性疾患に対し有効性が認められている。黄連解毒湯は血圧降下, 止血, 脳血流増加作用などを有し, 釣藤散は血圧降下, 中枢神経抑制, 高脂血症改善作用などを有している。いずれも脳血管障害に伴う治療薬として使用されており, これら薬剤が血小板凝集能に与える影響について *in vitro* において比較検討を行った。

【対象および方法】対象は黄連解毒湯は健常男子 5 例 (平均年齢 27.0 歳), 釣藤散は 10 例 (平均年齢 28.3 歳) である。血小板凝集能測定には二光バイオサイエンス社製 NBS Hematracer V を用いた。3.8% クエン酸ナトリウム溶液と全血を 1 : 9 の比率で混合し, 遠心後, 上清を $31.0 \times 10^4 / \mu\text{l}$ の血小板浮遊液に調整し被検血漿とした。ツムラ黄連解毒エキス原末 (TJ-15) は 10mg/ml, 50mg/ml の濃度に, ツムラ釣藤散エキス原末 (TJ-47) は 1mg/ml, 10mg/ml, 50mg/ml, 100mg/ml の濃度に蒸留水で溶解した。被検血漿と黄連解毒湯, 釣藤散の比率をそれぞれ 4 : 1 に混合し, できた混合液 200 μl に血小板惹起物質 ADP, エピネフリンをそれぞれ 20 μl 添加し血小板凝集率を求めた。なお, ADP は 4 濃度, エピネフリンは 3 濃度を用いた。黄連解毒湯, 釣藤散添加血漿における ADP とエピネフリンの濃度および変化率, さらに, 被検血漿に黄連解毒湯, 釣藤散を添加し血小板凝集能の経時変化を調べた。

【結果】黄連解毒湯添加による血小板凝集能は ADP 濃度 1.0~10.0 μM まで軽度から高度に抑制され, エピネフリン濃度では 0.1~3.0 $\mu\text{g/ml}$ まで高度に抑制された。釣藤散による血小板凝集能は釣藤散と ADP が低濃度の時, 亢進を認め, 両者ともに高度になるに従い抑制された。エピネフリンでも同様の変化を認めた。黄連解毒湯による経時変化では ADP 添加後 15 分で血小板凝集の抑制が強く, 経時的に弱くなる傾向にあった。釣藤散では ADP, エピネフリンともに血小板凝集の抑制を認め, 経時変化は認めなかった。

【まとめ】黄連解毒湯は 4 種, 釣藤散は 11 種の生薬よりなっており, 一部共通の薬効を持つとされている。しかし, 血小板凝集能への作用は異なっていた。これは血小板凝集の代謝系への作用が異なるためと考えられた。